

音楽の散歩道 その10の8

— ベートーヴェンの「第9」200年記念 —

悲しみと苦悩に満ちた真実のショパン、ショパンを見守るサンドとリスト(1)

| 鹿児島市 |

| 東区・荒田支部 |

| 大海クリニック・大海宮崎クリニック |

| 加治木温泉病院 |

粟 博志

粟 隆志

大西 浩之・海江田 寛

夏越 祥次

はじめに

タイトルのように、昨年からベートーヴェンの「第9」の作曲200年を記念して、リストによる、そのピアノ・トランスクリプションについて書き進めているが、ベートーヴェンの「第9」を聴いていると、時々、こんな事が頭を過ぎる。

もしベートーヴェンが王侯・貴族に生まれ育ち、裕福で満ち足りた人生を送った音楽家であったならば、彼は「第9」を作曲したのだろうか？彼は作曲する事ができたであろうか？そして現代のように、大衆までもが「歓喜の歌」を声高らかに歌っていただけるか？…と。

私は、ベートーヴェンが、生きる為に生涯休まず弛まず、生活の糧として作曲し続け、然も作曲という天賦の才を研ぎ続け、深化させ続けた終着点が、「第9」であり、「歓喜の歌」であったと思う。

絶えず進行し続ける難聴と、経済的困窮という苦悩の中、残り少なくなってくる人生の闇の中で、一人の音楽家、一人の人間として、一条の光を頼りに、めらめらと心の奥に燃え盛る魂の叫びに追い立てられるように書き上げられた曲だからこそ、その先にある平和で輝かしい未来に向かって、歌いあげられる大合唱「歓喜の歌」が、大衆の共感を以って迎えられるのだと思わずにはいられない。

ベートーヴェンの人生は、「音楽家の作品は、正に音楽家の人生」である事を、私共に教えてくれる。

何よりも、人間の感情の表出を最重要視した、初期のロマン派の音楽を理解するには、音楽家の人生、就中、若かりし頃の人生を知らずしては語れない。

本稿では、リスト、フェリクス・メンデルスゾーン（以下フェリクス）、ショパンの3人3様の人生を振り返る事により

①リストのベートーヴェンに対する熱い思いを述べると共に、

②リストとフェリクスのバッハに対する熱い情熱を述べたい。

③それらは、硬い殻に閉じこもって人生を過ごしたショパンの、悲しみと苦悩に満ちた、真実の人生を浮かび上がらせる事に連がる。

④更には、ショパンを見守る ジョルジュ・サンドと、ショパンに温かい眼差しを向ける リストに関しても述べたいと思う。

これらを述べる前に、若干の基礎知識も知っておく必要がある。

毎年、毎年、世界のあちこちで戦争や内乱が起き、それが数年、時には何十年も続けられている。

無防備、無抵抗の親、兄弟、子供などの家族、隣人、同胞が攻撃目標となり、虫けらのように無差別に殺される。何万人も。

殺されずとも、インフラは破壊され、食糧

の供給を絶たれ、医療を絶たれ、餓死や病気で死んでゆく。

難民は世界中に溢れる。逃げる途中で、海の藻屑になる人達も多い。

無防備な弱小国は、常に大国に威嚇され続け、大国の顔色を伺い、発言を控え付度する。

世界は、大国間の微妙なバランスの上にかろうじて均衡を保っている。

災害と同じで、他人事と思っても、何時それが自分達の身に降り懸かるか分からない。明日は「我が身」ならぬ「我が国」である。

既に本誌でも一部を述べたように、日本が外国により属国、あるいは植民地化の危機に見舞われた事が数度ある。

女真族による「刀伊の入寇,1019」、鎌倉時代中期のモンゴル帝国による、2度の「元寇,1274,1281」、近くは大英帝国による「薩英戦争,1863」である(図128)。



図128 薩英戦争, 1863
世界最強の大英帝国海軍を撃破・退却させる薩摩藩、「やればできる！」

更に1864年、元治元年の「第2次下関戦争」(「馬関戦争」あるいは、英・米・仏・蘭の四ヶ国艦隊による「下関砲撃戦争」)では、連合軍の17隻の軍艦の近代化武装による攻撃の為、長州藩の壇ノ浦、彦島、州岬、前田の各砲台は、壊滅状態となり、前田浜に陸戦隊の上陸を許した上、占拠された。

巨額の賠償金、軍備の弱体化(砲台撤去)などで身ぐるみ剥がされた長州藩に、連合軍の更なる要求が突きつけられた(図129)。



図129 第2次下関戦争, 1864
英・米・仏・蘭の四ヶ国軍に占拠された前田砲台、数門の大砲は、おみやげに持ち去られる

彦島の租借提言である。租借とは、国同士が合意の上、他国の領土の一部を一定期間、期限を限って借りる事で、植民地政策の第一歩である。

安全な拠点、租借地に拠点を置き、相手国に難癖をつけ、侵略するのが植民地支配の手法である。

この彦島の租借提言は、高杉晋作、伊藤博文の懸命の働きにより、幸いにも避けられた。

高杉晋作は、五代友厚らと共に1862年に幕府使節団の随員として、アヘン戦争(1840-42)で敗北し、欧米に植民地化されつつある清国の現状を、上海で具に見聞していたし、伊藤は藩命で、1864年よりロンドンに滞在し、西欧文化・西欧情勢の吸収に努め、欧米列強の圧倒的工業力、軍事力の強大さを認識し、開国論に翻意し、藩難に直ちに帰国したのである。

ともかく、高杉が租借の重要性を認識していたのは、極めて幸運であった。

翻って、現在の日本の現状はどうだろうか？日本の国土は大丈夫であろうか？

日本人が気付かぬうちに、(日本人にとっては高価でも)、円安により、国土の重要地域の土地、建物が外部から、食い潰されては、いないだろうか？

国の運命が、多かれ少なかれ、その国民

一人一人の人生に直結する事は、自明の事であるし、就中、主権国家に属さない人にとっては、一層顕著であろう。

ここでは更に、ショパンが若い頃を過ごしたポーランドを概観する。

それがショパンの人生と音楽を知る上で、重要な助けになるものと、思われるからである。



図130 現代のヨーロッパ地図 (googlemap) ポーランドと周囲各国のおおよその位置関係を確認

図130は、現代のヨーロッパ地図(部分, Google map)である。ショパンの時代のものではないが、各国の位置関係が分かる。

長い歴史を持つヨーロッパの大国・ポーランド王国(選挙王政によるポーランド・リトアニア共和国)は、18世紀になると、王位継承問題による内戦(ポーランド継承戦争)や対外戦争で弱体化し、周囲の大国に付け込まれる隙を与え、その侵略を許す原因となった。

ポーランドが自国の危機に気付いた時は、既に手遅れであった。

ポーランドは以後、長年に亘り、プロイセン王国、オーストリア帝国、ロシア帝国の3大国により、翻弄される事となる。

1772, 1793, 1795年、わずか20余年の大国の思惑による、3次のポーランド分割を経て、「ポーランド」という国家は、地上から、歴史から消滅したのである。

ポーランドの独立国家としてのアイデンティティ、危機感、国防意識の欠如、事勿れ主義の結果である。

何とかなるだろうと思っけていても、何とかならないのが、刻々と変わる世界情勢である。

ロシアは、旧リトアニア、ウクライナ。

オーストリアは、ポーランド最南部、西部。

プロイセンは、ポーランド西部を併合。

ポーランドの民衆の悲劇は、ここから始まる事となる。

ナポレオンが勝利したナポレオン戦争で、一時期、ワルシャワ公国が建国され、フランスに取り込まれたが、ナポレオン敗退後のウィーン議定書で、公国は解体され、その大部分が、ロシア皇帝の支配下である、ポーランド立憲王国(国王はロシア皇帝)が樹立され、旧ポーランド人は、ロシア皇帝の支配下に置かれた。

1830年11月29日夜、ワルシャワでロシア帝国に対する武装蜂起、「11月革命」(「ワルシャワ蜂起」、「11月の夜」)が勃発。

これは、ワルシャワのロシア帝国の陸軍士官学校の下士官(ポーランド人)による蜂起に端を発し、大規模な戦闘が続いた。

然し翌年、1831年9月8日、9ヶ月間に亘る激戦の末、ワルシャワは陥落した。

多数の人が処刑され、投獄され、戦死者は数万人に及んだ(図131)。



図131 9ヶ月間激戦が続いた「ワルシャワ11月革命」数万人が死亡、数万人が難民となる

数万人の人達(仏には約1万5千人)が、難民となり、西ヨーロッパに亡命した。

この蜂起に対して、共にポーランドを分割したプロイセン、オーストリアは、革命の飛び火を恐れ、ロシアに肩入れした。

さて第28代アメリカ大統領・ウィルソンの提唱した「14ヶ条の平和原則, 1918」の第5条は、民族自決を提唱し、第1次世界大戦後に、ヴェルサイユ宮殿で調印された「ヴェルサイユ条約, 1919」で、ポーランドとチコスロバキアの独立が確定した (図132)。



図132 パリ講和会議, 1919
左からロイド・ジョージ(英), オルランド(伊), クレマンソー(仏), ウィルソン(米)

ポーランド分割から、已に120余年が経過していた。

なお、「ヴェルサイユ条約」の正式名称は、「Treaty of Peace between the Allied associated Powers and Germany, 連合国とドイツ間の平和条約」である。

ここで重要な単語は、「country」ではなく「power」である。Powerは元来、「大国, 強国」の意味があるが、この条約は、強国が弱小国(敗戦国)に平和を与えてやる、とい

う意味合いが込められている。

(つい先日、テレビを見ていると、本年1月のダボス会議のトランプ大統領の演説で、彼は「the Great Power」と言う表現を用いていた。ちなみに、「a nuclear power」は「核の力」ではなく、「核保有国」である)。

「国」は、理論や筋論ではなく、「power, 力」を持つ事の重要性を示唆している。

残念な事であるが、いつの時代も世界情勢は、力で動かされているのである。

1920年には、民族自決, 国際協調の理念を柱に「国際連盟」が設立された。

国際連盟に関して、日本は移民を差別・排斥するアメリカの「移民法」を問題視し、「人種平等原則」を国際連盟規約に盛り込む事を主張したが、ウィルソンの反対で採択されなかった事は、記憶しておいてもよいかもしれない。

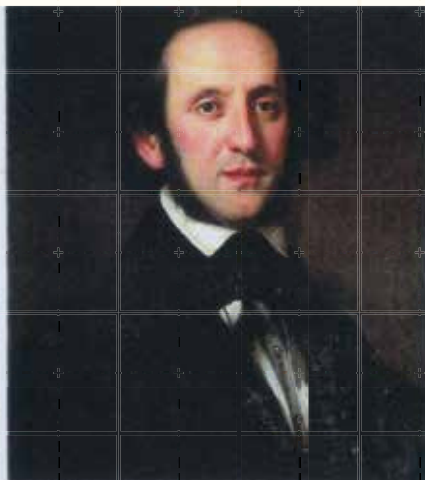
アメリカに関しても、同年の大統領選で共和党のハーディングが当選し、議会でアメリカの基本外交政策のモンロー主義が優位で、結局、肝心のアメリカが、国際連盟には加盟しなかったのである。流動的である。

国際政治は複雑である。

以上の国際情勢を頭に入れ、リスト、メンデルスゾーン、ショパンの主に少年期の人生を振り返ってみるが、ポーランド分割はショパンの人生にとって極めて重要な意味を持つ(下図)。



リスト (27歳)



メンデルスゾーン (34歳)



ショパン (19歳)

図

(Part24) リスト、メンデルスゾーン そしてショパンの人生

〔1〕 フランツ・リスト (1811-1881)

リストは、エルテルハージ伯爵の領地、ハンガリーのドボルヤン村（現オーストリアのライディング）に生まれた。

ウィーンからは、わずか 100km である。

リストがハンガリーに生まれた事は、極めて幸運であったと言わなければならない。

ハンガリーは、1688 年以降はオーストリア帝国（ハプスブルグ家）の支配下にあったからである。

リストは独語で育ったので、ハンガリー語は話せなかった。

逆に、ロシア帝国の支配下のポーランドに育った、ショパンは不運だった（後述）。

父にピアノなどを学んだリストは、9歳の時にはエステルハージ伯爵の宮殿での、ピアノ演奏と初見演奏で、貴族達を驚嘆させるほどであった。

1822年、11歳のリストは、ハンガリーの貴族達から6年間の奨学金を得、ハンガリーの希望と期待を一身に背負い、一家でオーストリアに移り住んだ。

音楽の都・ウィーンでは、ベートーヴェンの一番弟子のチェルニーに、ピアノ奏法や移調等の即興演奏、初見演奏等の訓練を受け、更に、ハプスブルグ家の宮廷楽長・サリエリに作曲理論、読譜を学ぶ事ができた。

2人の師は、その勤勉さと学習能力の高さに驚き、リストの才能を伸ばそうと、無料で熱心に指導した。

チェルニーはリストを家族同然に扱い、その両親は、孫のようにリストを可愛いがったし、サリエリが、リストの生活環境の改善や更なる経済状態の改善を、貴族達に願い出た長文の手紙も残されている。

リスト少年は、貴族達が与えてくれた機会に感謝して、報いたのである。

ウィーンでのリストのP演奏会は大評判を呼び、ベートーヴェンの秘書役のシンドラの協力を得、リストはベートーヴェンに面会し、彼の前で演奏する事も実現したのである。この奇跡的事実が、リストが生涯ベートーヴェンに尊敬の念を抱き、ベートーヴェンの交響曲のピアノ曲トランスクリプション作曲や、ポンのベートーヴェン記念像の建立に連がるのである。

ウィーンでの作曲の最大の成果は、「ディアベリのワルツの主題による8つの変奏曲」である事は既に述べた。

わずか11歳の少年が、ドイツ・オーストリア圏の代表的作曲家・ピアニスト50人の一人に選ばれたのである。

ウィーンでピアノ演奏と作曲の両方で、十分な成果を残したリストは、1823年12月には、音楽の都・パリに移住した。

1824年、13歳のリストは、パリおよびイギリスでデビュー演奏会を開き、驚異的成功と名声を手にした。

特にロンドン公演は、ウィンザー城で国王・ジョージIV世臨席のもとに行われたが、感激した国王は、更にロイヤル劇場での演奏会にも出席するほどであった。

ロンドン公演は、ピアノ製造業者・エラールの後援も受けていた。リストの名声が窺われる。

リスト親子の偉かった事は、成功に溺れて、金儲けの為の演奏旅行を続ける事なく、パリに落ち着き、音楽理論と作曲をパエールに、対位法をレイハ（ライヒャ）に学んだ事である。勤勉なリストは学ぶ事を止めなかった。貴族達の6年間の契約期間があったからかもしれない。

いずれにせよ、リストはウィーンとパリを代表する4人の高名な音楽家達から、若くして、バッハらのバロック音楽、モーツァルト、ベートーヴェンの古典派音楽の王道

を身に付けたのである。

リストが同世代のロマン派の音楽家達とスタートラインに立った時、既に作曲家としての基礎知識、演奏家としての演奏技術を完全に身に付けていたのである。

リストに欠けていた唯一のものは、文学、歴史などの教養であったが、これらもサロンの教養ある女性達や友人達などから貪欲に吸収し、我が物とした。それらは、交響曲、交響詩、宗教曲など、無数の曲を生み出す原動力となった。

図は、文学を主題とした、「ファウスト交響曲」, 「ダンテ交響曲」(図 133,134)。



図133 ゲーテのファウストによる「ファウスト交響曲」, ベルリオーズに献上 (バーンスタイン指揮, 1977)



図134 ダンテの神曲による「ダンテ交響曲」, ワーグナーに献上 (レエル指揮, 1978)

1825年, 14歳のリストはパエールの助けを借りて, パリ・オペラ座で音楽監督・クロイツェルの指揮で, オペラ「ドン・サンショ, あるいは, 愛の城」を初演した(図 135)。



図135 14歳のリストのオペラ「ドン・サンショあるいは愛の城」, (名ヴァイオリニスト・クロイツェル指揮, パリ・オペラ座)

クロイツェルは、ベートーヴェンから「クロイツェル・ソナタ」を献呈された名ヴァイオリニスト, 作曲家である。

当時のパリでは, 作曲家の必須条件は, オペラの作曲ができる事だったので, リストはそれをクリアーしたのである。

1826年, 15歳の時には, 後の12曲の「超絶技巧練習曲, 1851」の原曲となる「若いリストによる, あらゆる長短両音階の練習課題としての48のピアノ練習曲」が作曲された。然し実際に作曲されたのが, 12曲だったので簡便的に, 「12のピアノの為の練習曲」とも呼ばれる(図 136)。

リスト少年が学んだ作曲理論実践の為の第一歩であったのである。

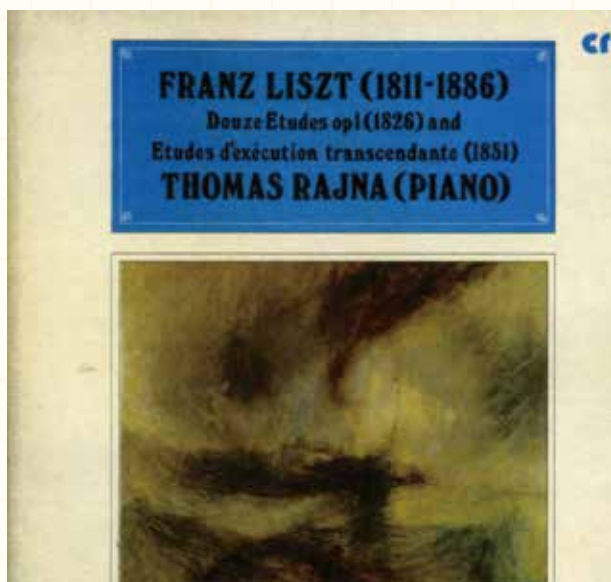


図136 「若いリストによる、あらゆる長短両音階の練習課題としての48のピアノ練習曲、1826」

<付録>

練習曲集や前奏曲集に於いては、調性理論から、曲集が、12,24,(48)曲の組み合わせから成るのは、必然中の必然であり、特別なものではない。

その原点は、バッハの48曲の前奏曲とフーガから成る「平均率クラヴィーア曲集、ブックI, II」である。

この曲集は、元来、バッハの長男・ウィルヘルム・フリーデマン・バッハのクラヴィア練習曲としての11曲の前奏曲、「W・F・バッハのクラヴィア小曲集」から発展したもので、平均率の24調性と、最も重要なフーガの作曲と演奏を、若い音楽家が身につけるようにとの目的で作曲したものである。

もちろんバッハ＝フーガであり、最終的には、あらゆる調性でのフーガの作曲とその演奏が最終目的である事は言うまでもない。

今日「平均率」の事を私達は、当然の事として受け入れて、考える事もないが、この平均率は、1オクターブを12の半音に等分画した音率である。通常12平均率が用いられる(ピアノでは、1オクターブが、7つの白鍵と5つの黒鍵で12等分される。従って、長短合わせて24調性が発生する。

この方法は、多くの利点を有するが、簡便法であり純正律ではない。

これを聴き分けていた昔の人はすごい。

ベートーヴェンが最も信頼したモシュレスは、「ミサ・ソレムニス」のロンドン初演、シンドラーの「ベートーヴェン伝」の英訳、メンデルスゾーンのパianoの師、ライプツッヒ音楽院のパiano科教授等で知られているが、彼は1828年に「24の練習曲」を出版している。

8歳でモーツァルトの内弟子となり、ベートーヴェンと名声を二分したピアニスト、作曲家のフンメルが、1833年に「24の練習曲」を出版しているが、いずれも、1826年に15歳のリストが、全調性の曲集発想の時期より遅れており、リストの先見性が、よく現れている。

リストやショパンの練習曲は、イギリスで活躍したクレメンティ、クラマーらの演奏スタイルから発展したものであり、バッハの「前奏曲とフーガ」スタイルから、対位法的要素を漸減した別の流れとして発展してきたものである事は知っておく必要がある。

クレメンティの「グラドス・アド・パルナッスム」の初版には、フーガが多く含まれていたが、その後の版でフーガは除去された。

この頃、練習曲風の自由な小曲を「前奏曲」と呼ぶ事も行われ始めた。

リストやショパンの「練習曲」は、単なる練習曲ではなくなり、一般的な教則本とは別物となった。

それらは高度な技術を要求し、芸術性を要する「演奏会用練習曲」であった。

リストは、ショパンの練習曲の数曲を演奏会で演奏し、ショパンの曲を世の中に知らしめようと努めた。

先に述べたモシュレスやフンメルの「24の練習曲」は、その先駆けと言うべきものである。

チェルニーは、長い表題の付いた、「すべてのクラシック音楽を完璧に演奏する為の、予備練習の為の、長調と短調で書かれた48のプレリュードとフーガ」をリストに献呈し、24曲のプレリュードとフーガから成る「フーガ演奏教本」をメンデルスゾーンに献呈している。

チェルニーは、この2人が初期ロマン派の中で、バッハの伝統を伝える事のできる音楽家だと認識していたのだろう。

更に彼は、「平均率クラヴィア曲集」の校正や、ベートーヴェンの交響曲全曲、モーツァルトの交響曲の6曲のP用編曲を行っている。

バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンの重要性を認識し、敬意を表しての、作曲、編曲だったのだろう。

(付録おわり)

リストがバッハに靈感を得て作曲、編曲したP曲は5曲ある。図137は、ピエトロ・スバダ演奏（1986）の曲集である。

第1曲目の「6つのプレリュードとフーガ」だけでも、演奏時間は70分を要する大曲であり、この中の「第1番イ短調」を聴いただけで、リストがバッハの神髄を、確実に我が物にしていた事が感じ取れる。



図137 リストがバッハに靈感を得て作曲、編曲した5曲。第1曲目の「6つのプレリュードとフーガ」だけでも演奏時間は70分の大作

図138は、リストが、自作や、バッハ、モーツァルトなどを編曲した、「オルガン全集」である（ハゼルベック演奏、録音1983）。

この曲集は約60曲から成り、リストのオルガン曲への憧れ（バロックへの思い）を余す所なく伝えている（LP6枚組）。

この全集の中に、ショパンの「前奏曲、作品28の第4番、第9番」の2曲が入っている事は、リストのショパンに対する思いやりと見るべきだろう。



図138 リストの約60曲から成る「オルガン全集」6LPから成る膨大な作品群。ショパンの前奏曲（プレリュード）も2曲ある

リストは、他の音楽家の曲の普及、慈善活動、音楽家の地位向上、後進の育成に努め、死ぬまで演奏、作曲、教育活動を続けた。

旅行好きで、生涯、多くの弟子や信奉者達に囲まれて過ごした（図139,140）。

今回は、メンデルスゾーン、ショパンまで、更には、ベートーヴェンの「第9」「第5」までの予定だったが、リストまでとした。

また、主権を有する「独立国家」を考える上で、ショパンの人生にかかわるポーランド分割を、それに加え、昨今の国際情勢と類似点を有する、ヴェルサイユ条約、国際連盟に於ける米国の立ち位置に関し、若干言及した。



図139 バイロイトのワーグナーの自宅，バーンフリード，1882
リストとその後部のハンス・リヒター，リストの義理の息子・ワーグナー，リストの二女・コジマと孫・ジークフリード（左下）



図140 リストの赴く所，弟子，信奉者有り
リストは死ぬまで，演奏，作曲，弟子の教育，旅行をやめなかった（写真中央，白髪の高長髪）。
写真は死のわずか2ヶ月前，1886年6月5日

最後に概数であるが，代表的作曲家の生涯作曲数を，一覧表にして示す。

生涯作曲数

バッハ：1,087 曲
モーツァルト：約 600 曲
ベートーヴェン：138 曲
チェルニー：861+ その同数
メンデルスゾーン：約 750 ~ 900 曲
リスト：約 700 曲
ショパン：74+ 約 35 曲

この表から，作品番号の付いたショパンの曲は，わずかに74曲にすぎないことが分かる。

それに遺作などが加わるが，極端に少ない。それに曲の多くが小曲であるのは，いかにも

寂しい。寂しすぎる！残念である！

この事に関して，大部分の記載は，その理由を，ショパンが短命だったからと，いとも簡単に結論付けている。

然し，それは大きい誤りである。

理由は明白である。

伝記作家などは，ショパンについては，広く深い知識がある可能性はあるが，ショパン以外の作曲家の事を知らないからである。

知らないで，他の作曲家と作品数を比較すると言う発想が湧かないのである。

少なくともショパン（39歳）は，メンデルスゾーン（38歳）より，1年長生きをしたし，モーツァルト（35歳）より，4年も長生きした。

然し，ショパンとメンデルスゾーンやモーツァルトとの，作品数の差は明白である！

なぜだ？

今日まで，その理由を述べた人はいないし，その理由を考えた人もいない！

ショパンの死から，175年以上もの年月が経過しているのに！

その理由を解き明かし，真実のショパン像を描き出す事が，本稿の重要な目的の一つでもある。

(つづく)